

(このプリントは毎週作っているものです)

「神は小さな格言に宿り給う」

旧約 コヘレトの言葉 9章13節－18節

- 1、「コヘレト」は招集するという言葉から来ている。「集会で語る者」の意味だとされる。この書物は、一つのまとまった物語や思想体系や神学の知識をのべたものではない。日常生活の経験の中から出た深い知恵を含んだ文章や格言が並べられている。一例「阪神淡路大地震の時、知識は役にたたなかつたが、知恵は役だつた」
- 2、戦争の戦略理論を極めつくした王が町を攻めた時、その町の貧しい賢人が、ちょっとした機転やトリックの知恵で、その攻撃から町の人を救った、しかしこの人は顧みられなかつた、という今日のテキストから二つのことを考えてみる。
- 3、①何時の時代にも確かに貧しい人はいる。何故なのか。社会的な搾取があるからではないか。紀元前2世紀後半のユダヤは、アレキサンドロス大王の支配が終わって、プトレマイオス王朝とセレウコス王朝の二つの勢力が争って、5回のシリア戦争(B.C. 301-198)があつた。ユダヤは自治権があつたものの、政治的には王朝に服従を迫られ、徴税制度の強化、大土地所有制や輸出商業権の独占形態により、民衆の苦痛は過酷で、奴隷への転落者が増し、政治的支配と戦争の二重の苦しみが民衆にのしかかっていた。②祭司による神殿政治(公定宗教)は、「神は正しい人に報いる」(因果応報)との律法遵守を基本原理として、犠牲の祭儀ができない者を神の罰を受けているものと差別し、社会的搾取に加えて宗教的差別が貧しくされた人々を苦しめた(神殿体制が政治的抑圧を補完)。「貧しいこの人のことは誰の口にもものぼらなかつた」の意味は大きい。「貧しい人の知恵は侮られ、その言葉は聞かれない」は差別の二重構造を示している。コヘレトは、「因果応報」の体系的思想に否を言い、賢者の格言的知恵を逆手に取って絶望の淵にある民衆を励ました。
- 4、抑圧され、貧しくされた人たちに言い伝えてきた知恵は大事なのだ。それは生き抜いてゆく力だ、神の働きはそのような格言に宿っているのだ、といったのが「コヘレト」である。本当に大事なことは、「賢者の静かな言葉が聞かれることなのだ」。
- 5、武器を持つ論理は、戦争をするための体系的論理だ、しかし日常の知恵や格言というものは、それに勝って人を活かす。「知恵は武器にまさる」。30年戦争(1618-1648)の時、アルザスの食料の欠乏を貧しい生活者の知恵が救つたという話がある。「ライオンの歯」(「ダン・ド・リオン」「ダンテリオン」「レーベン・ツアーン」)「たんぼぼ」を食用にする知恵であつた。
- 6、「太陽の下に」(13)はコヘレトでは29回。生活の物理的空間と同時に商業利益、軍事力優先の当時の王朝を示す。しかし、そこを生き抜いてきた神が支える民衆の知恵が残されている。苦しい時代を生き抜いてきた先人の知恵を再考したい。